

音楽学では音楽と言語の関係をどう考えてきたか

How have musicologists recognized the relationship between music and language?

矢向正人^{*1}

Yako Masato

^{*1} 九州大学大学院芸術工学研究院

Faculty of Design, Kyushu University

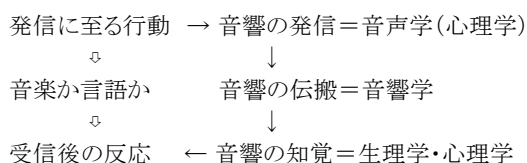
Music has been closely tied to language from its outbreak stage to this day because most of music has been sung with lyrics. This document describes how musicologists have recognized the relationship between music and language.

1. はじめに

音楽の多くが歌詞を伴う歌であることからわかるように、音楽と言語は、発生段階から今日に至るまで密接に結びついてきた。本発表では、音楽と言語の関係を音楽学がどう捉えてきたかについて述べる。

音は周囲に溢れており、心地よい音もあれば耳を覆いたくなるような音もある。そして、人は音を発し、聴くことができる。では問う。まず、音楽と音楽でないものの境界は何だろう。西洋の調性音楽では、リズム、旋律、和声が音楽の3要素とされる。しかし、旋律のない音楽や和声がない音楽もある。また、気持ちよくなる音が音楽、気持ちがこもっている音が音楽、ノリのいい音が音楽などの答えがある。しかし、それらは音楽の条件だろうか。

音楽と言語のコミュニケーションの仕組みを知るため、その図式化を試みる。まず、音楽も言語も、音を発し聴くという基本的な意味での行動(act)が認められる。この行動をめぐって複数の行動が連結している。すなわち、音響の発信に至る行動があり、音響の発信があり、音響が伝搬し、それが受信・知覚され、受信後の反応がある。対応する研究分野も、下図のように音響の発信から受信に至るまでである。この音声コミュニケーションを成立させるためには、そこに介在する音声、身振り、それらの意味が、送り手と受け手に共有されねばならないとされる。



しかし、上図右に示した分野の検討のみでは音声のコミュニケーションを知るために十分ではない。音楽も言語も音を発するには発信に至る行動と目的があり、音を聴いたあとにその反応を行動で示す。なぜ声を発したか、声を聴いた後にどう行動が変化したか、その目的と受信後の反応がわかって、ひとつづきの音声行動は知られる。

2. 音の反復と音楽

原初的な音楽から考えていく。まず、音楽は、音を発するという具体的な成り立ちをもつ。では、音楽として音を発することは、

連絡先: 矢向正人, 九州大学芸術工学研究院, 815-8540
福岡市南区塩原 4-9-1, yako@design.kyushu-u.ac.jp

音に対するどんなはたらきかけなのだろう。まず、発した音を自分にも他者にも聴かせるためには、発せられた音の存在を強めて確たるものにする。では、発せられた音の存在を強めるにはどうすればよいのか。発せられた音が持続もしくは反復すれば、音の存在は強められ確たるものになる。強められた音により他者との同一性の体験も可能となる。音の反復は音楽を成り立たせる前提である。

ここで、音楽を発せられた音が持続する運動と考えてみる。いったん存在させられた音は皆この運動を獲得し、持続し延び広がっていきこうとする。そして持続する音は音の反復を促す。反復により音はその存在を強固にする。

音楽の基本的な条件が反復であるとする指摘は数多くある。クルト・ザックスは『音楽の源泉』において、特定の音響や音程パターンの持続と反復が最初期の音楽に見出されると述べる。ジョン・ブラッキングも、原初の音楽には、反復、主題と変奏、2部形式のような繰り返しの原理があると述べる。ウォーリン等による『音楽の起源』でも、音の反復が原初的な音楽の条件であることに諸説の合意をみている。反復は幼児の音楽でも大きな意味をもち、反復され方は動物の音声コミュニケーションを特徴づける。音の模倣も音の反復とみなすことができる。

反復を音楽の原理とする考え方は、西洋の音楽理論にも見られる。たとえば、ニコラ・リュウエは、旋律の成り立ちを反復とその変型から説明している。また、レナード・マイヤーは、音楽の様式を規定するもっとも大きな要因を音の反復から説明している。この他、同一音高の持続や反復を原初的な音楽の条件とする説は数多くある。音楽を社会的な行為として成立させるためには、他者と共有される同一性の体験が不可欠であり、それを可能にする原初的な行為が、音を持続し反復させる行為である。

さて、音を反復するにも、大勢で反復すれば、そろわずに不一致が入り込む。その結果、反復のなかに、一致と不一致が作られる。不一致を伴う反復が続くなら、そこに、差異が累積しそこから異なる表現の可能性が生まれていく。

音楽の3要素を、音の持続と反復から基礎づけることができる。まず、リズムや拍をもたらすのは音の反復であり、反復のパターンである。速度によって反復されればテンポが生まれる。多くの音楽は、特定のリズム・パターンが繰り返されて作られる。次に、旋律は複数の音高から構成されるが、特定の音高を中心に音が連ねられる構造は、音の反復と関連が深い。反復のなかの差異の累積が、複数の音程パターンを介在させ、旋律をもたらした。次に、和声は、美しい響きの探究によりもたらされた。美しい響き、協和的な響きを要求したのは、音を持続させる行為である。美しい響きは、持続することによってより美しくなる。音と音と

が重なりあう響きの美しさは、協和する響きの探求をもたらし、和声を準備した。

3. 音楽の反復と言語の反復

人が音を反復するのは音楽においてのみではない。言語においても音は反復して用いられ、コミュニケーションを促進する。しかし、音楽における音の反復と、言語における音の反復とは次の点で大きく異なる。言語として音を反復するときには、意味がいったん伝わってしまえば、それ以上音は繰り返される必要はない。したがって、音の反復提示は、言語のコミュニケーションにとって本質的な条件ではない。言語における反復は、あくまで意味を誤りなく伝えるための手段である。

他方、音楽は反復それ自体により根拠づけられている。音楽において、反復によりさらなる反復が促進される。音の同一性がすでに認定されているにもかかわらず、音は反復される。したがって、音の同一性が認定されたうえでさらに音が反復されるかどうか、言語と音楽とを分ける。そして、音を反復する行為が、言語的意味や文脈から分離したとき、音楽の段階になる。

4. 音意味同型性

言語も音楽も意味をもつが、意味の作られ方は大きく異なっている。両者はともに韻律的特徴と分節的特徴をもつが、言語が分節によって意味を生じるのに対して、音楽は韻律的特徴の一つであるピッチの高低変化により意味を生ずる。この違いを踏まえ、音楽と言語の関連について、言語の韻律的側面が強調され組織化された音声表現が音楽であると説明されることがある。発表者は、音楽と言語の違いを問われたとき、言語とは音が意味を指示しコードによりメッセージを伝達するコミュニケーション、音楽とは音と意味が同型でありコードとメッセージが不分離のまま伝達するコミュニケーションであると答えている。音楽は、象徴的な意味や概念を伝達するのではなく、それ自体を伝達する。この性質は「音意味同型性」(sound meaning isomorphism)と呼ばれている。

しかし、音楽と言語の関係については慎重な考察が必要である。そもそも音楽の多くが歌詞を伴う歌であり、両者は分離していない。歌の中の掛け声や囃子ことば、祝詞や神下ろしなど、言語とも音楽ともつかない音声表現がある。文化人類学の川田順造は、憑依状態で発せられる意味不明の言葉 (glossolalia) や音感語 (vocal) にみられる言語音と非言語音の中間的なはたらきに注目する。人は、分節化されていない叫び声を発することがあるし、表情や身振りを伴って意思を通じることがある。それらは言語で回収しきれない表現をもつが、音楽でもない。

5. 音楽の言語起源説

現在の民族音楽学と音楽起源論では、初期の音楽が言語と分離していなかったとする見解に諸説の合意をみている。音楽起源論には、言語が音楽から生じたとする説、音楽と言語の間とも言える前言語＝前音楽的な音声表現から双方が分岐したとする説、音楽が言語から生じたとする説のいずれもある。このなかで興味深いのは、前言語＝前音楽的な音声表現の仮説である。イヴァン・フォナギーは、音声の韻律的・身振りの要素、すなわち、咽喉の状態、抑揚、テンポ、ラウドネスが、そのまま心的な状態の表現であるような初期言語が存在し、そこから言語と音楽が分離したと述べる。デイヴィッド・アームストロング等も、身振りの音声表現がはじめに存在したと述べる。

初期言語に類似する音声は、幼児の発声である。エレン・ディサナヤクは、幼児と親との声によるコミュニケーションから音楽が

生じた可能性を示唆している。このコミュニケーションには、幼児と親とが互いの声を模倣しあう段階があり、声は身振りや表情と相互補完しあっている。デイヴィッド・オラーは、幼児の発声は、初期言語と同様に非分節的な韻律的特徴をもつ音声であり、心理状態の直接的な表現であると述べる。オラーによると、言語獲得以前の幼児の発声には、1) 反射的な有声化の段階、2) 喉を鳴らして悦びを表現する段階、3) 金切り声やうなり声を発する拡張段階、4) 模倣が定型化した段階の4段階がある。

成人の発声にも、初期言語に類似する音声が存在する。たとえば、吃音は声によるコミュニケーションの困難を示すが、哲学者のジャック・デリダは、吃音には他者への伝達と発信者が自ら聴く行為が共存すると述べる。吃音のゆえに意味を共有しうるようなコミュニケーションが存在する。

6. 声の方向

音楽であっても言語でも、一般的な音声コミュニケーションであれば、声を誰からどこに向けられるかが明示されている。川田順造によると、声を発することは、1) 発せられる状況性、2) 発する者の現前性、3) 向けられたものの特定性を巻き添えに成り立つ。叫ぶ、呼ぶ、訴える、囁く、問う、賛える等のそれぞれにおいて、1)2)3)は異なる。声の向けられる相手も、権力者、恋する者、生まれ出た者、死者の誰に向けられるかにより、表現は異なる。たとえば、名を呼び名指されると、名を呼ばれたものは、否応なく他者との関係にさらされる。名指されたものを声の力は捕らえてしまう。東欧や南米には泣きながら死者(祖先)の名を呼び、死者と生者とを関わらせる儀礼がある。

カルル・シュトゥンプは、遠くの人に何かを伝えるために、大声をあげたり大きな音を出すことから音楽が生じたと述べた。音による伝達は、短時間で交信が可能であり、注意喚起、種の識別、視界外での位置確認のために有効である。他方、放射状に広がる音は、共同体内での結束を強める役割を果たす。それが大音声であれば、発信者の存在を誇示することになる。音を放射状に響き渡らせるとともに発信者を誇示する振る舞いを、フランク・リヴィングストンは「縄張り宣言信号」と呼ぶ。響き渡らせる音は声でなくてもよい。金管楽器と打楽器を主体とするオスマントルコの軍楽隊は、大音量で音を遠方まで到達させ、音楽の力とともに軍の力を示して士気を鼓舞した。

他方、音を放射状に響き渡らせる発声には、異世界との交信のための声もある。神や祖霊や目前の大自然に向けて、共同体の枠を超えて存在を誇示するように発せられる声がしばしば聴かれる。多くは日常的な声と区別される声が発せられる。朝鮮半島から大陸にみる占師の口を借りて霊が語る憑依の唱え声は、しばしば歌のように聴こえることがある。

7. 唱えと語り

ここまで述べた音楽と言語それぞれの音の表現方法は、様式化された音楽芸能である歌い物や語り物のなかに活かされている。どの国の音楽芸能においても、音楽よりの芸能から言語よりの芸能まで種目が段階的に存在する。

日本の音楽芸能:

歌い物(音楽的) = 長唄 > 声明 > 朗詠 > 謡曲 > 薩摩琵琶
> 筑前琵琶 > 義太夫節 = 語り物(言語的)

中国の音楽芸能:

歌い物(音楽的) = 太康道情 > 蘇州評彈 > 单弦牌子曲
> 北京琴書 > 京韵大鼓 > 陕北说書 > 快板 = 語り物(言語的)

日本と中国の代表的な種目が、それぞれ音楽と言語のどちらの性質を強く持つかを上に示した。語り物の多くはテキストをもち、語り手にはテキストの内容を誤りなく語り伝える役割が求められる。しかし、語りの質を決定するのは、何が伝えられたかよりも、どう伝えられたかである。語り手により強く求められるのは、テキストの内容よりも、そのアクチュアリティを伝達することである。この語りの技法が、声、イントネーション、発音、間、などを駆使した「語り口調」である。

様式化された語りを、音の発信と受信から検討しよう。たとえば、名を呼ぶ、囁くには、声に向けられる対象がある。他方、泣く、泣く、(虚空に向けて)叫ぶには、対象がない。歌い物や語り物は、双方の性格を併せもつ。まず、台詞を中心とする語りでは、声に向ける相手が想定されている。義太夫節では、ひとりの太夫が、複数の劇中人物の台詞を、声色を変えて語り分ける。子供、女、老人、町人、武士、悪人などの役柄に応じて、それらの性格や心理を彷彿とさせるような語りが作られていく。流麗で明快にすぎる語り口は好まれない。囁き声、囁き声、怒鳴り声などを適宜おり込み、場面に居合わせたようなアクチュアリティを作る語り口が好まれる。事実以上のアクチュアリティの語り口もある。

他方、声に向けられる対象が特定されずに淡々と語られる語り物の種目が声明などの唱え、唱えよりも旋律的な歌い物の種目が長唄や小唄である。声明の唱えでは、声の発信者が自らの声を聴くことを重視するため、声の発信者と受信者が分離されない状況が作られる。宗教的テキストは、内容よりも強度として共有され、そこに宗教的行事への参加と体験の感覚が生まれる。なお、唱えよりも語り物よりの種目である能の謡では、台詞は歌うように語られる。声は漠然と第三者に向けられるように発せられるが、時代や場所が特定され、情景が細かく描写される。

8. 言語をとおしてみた音楽の条件

言語との比較を踏まえ、音楽の条件を次のように規定し直してみる。

- 1) 音の反復への契機がある
- 2) 複雑化が自己目的となっている
- 3) 音響が発信者にフィードバックされている

まず、音は、模倣され反復するうちに、当初の目的にとつての余剰を含んでしまう。この余剰部分に新たな表現が加わると複雑化が促進される。複雑化は表現の更新を自己目的化し、音を発信者にフィードバックさせる。こうして音の複雑化と表現の更新が進むなかで、人はそれに音楽の概念を与え、音楽として自覚的に認識するに至った。

9. 意味と分離した複雑さ

歌としての音楽に言語と独立に意味があるかどうかは、その音楽が意味に回収されない余剰をもつかどうかによる。洋の東西を問わず、葬式の歌や求愛の歌のような、特定目的のための歌において、当初の目的を喪失するまで複雑化が累積する音楽の例がある。プロテスタントの宗教音楽であるバッハのカンタータは、19世紀以後は、音楽のための音楽としても演奏されている。真言声明の散華なども、歌われ続けるうちに、信仰心を保つという当初の目的とは無関係に、旋律が引き延ばされ分節が進んでいる。

意味に回収されない余剰をどう規則化するかについて、能の謡における例を述べる。日本の詩歌や韻文などの音数律は七五調であるが、日本のリズムは八拍子(やつびょうし)を基本とする。では、七五調を八拍子で歌うにはどうすればよいか。能の謡

には平ノリと呼ばれる12文字に8拍を対応づけるリズム・パターンがある。12文字と8拍の対応には多くの組み合わせが考えられるが、平ノリは、拍の延ばし方縮め方の規則、文字数の増減や旋律の有無に対応する詳細な規則に加え、臨機応変の表現や即興性を容れて、謡らしい特徴をもつリズムを作り出す。他方、文字数が多い中ノリ(16文字に8拍)、少ない大ノリ(8文字に8拍)は、平ノリほどの特徴を持たない。

意味に回収されない余剰について、次に、ニューギニアのカルリにみる音楽と鳥との対応づけを例に述べる。ステューブ・フェルドによると、カルリ人の音楽表現は、鳥に関する概念体系との間に対応関係をもっている。カルリ人が音を音楽として発するとき、人が鳥に成り代わることを媒介としてこれを行う。鳥との対応をこうして保った音楽表現は、音楽が鳥の声のメタファーを離れて独り歩き始めることに対して抑制的にはたらく。にもかかわらず、鳥との関わり方はカルリ人それぞれが異なるため、複雑化した音楽表現が、鳥の概念との対応から離れることがある。では、複雑化した音の表現は、鳥の概念世界との対応という当初の目的を喪失することはあるのか、それとも、この複雑さは当初の目的に回収され、その目的に応じたはたらきを強めることになるのか。フェルドは後者を支持しているが、より慎重に検討していく必要がある。

10. おわりに: 音楽と言語の境界を越えて

音楽と言語のコミュニケーションの比較の最後として、聴こえないものを介在させた声の表現について述べる。人は音楽において、聴こえる音をすべて聴いているわけではない。聴かれていない音を間に挟んでも音楽は成り立っている。音を出し終わったあと時間を隔てての反復(翌日、翌月、翌年など)を考えてみる。それだけの時間を隔てても、「ああ、あの音だ……」「あの旋律(楽曲)を再び聴きたい」という反復への希求が、演奏と聴取とを成り立たせている。しかし、音と音との間隔に何を聴いているかは、人それぞれ異なるため、たとえ同一の音楽体験であっても、聴いている音が同じであるとは限らない。

20世紀にみる音楽概念の拡張は、異なる文化圏の音楽を聴く機会の増加をもたらし、この結果、いくつもの音楽の同時的な聴取に加えて、聴き手どうしが同じ音楽体験を共有しない聴取のありかたが議論されるようになった。近年の音楽学は、異なる文化圏の音楽を人ひとりがいかにして理解しあるいは学習しうるかについて、バイミュージカリティの概念を用いて議論を重ねている。この結果、冒頭に示した音の発信と受信のコミュニケーション図式に対応づけられない音声行動も、研究対象とされるに至っている。

発表者は、山岳動物の音環境における認知のありかたを、音楽研究のテーマに加える提案をしている。動物の可聴帯域は、種により異なるため、異なる知覚が一つの生態系の中に混在する音環境が作られる。この状況下では音を模倣し反復しても、指示的な対応関係は形成されにくく、また、差異化や複雑化の契機が生じにくい。しかし、イブリーヌ・ルロワによると、山岳地域の生態系の中で、知覚が混在する状況は、安定的に維持されていく。いわゆるディスコミュニケーションを介在させた音声の発信と知覚は、人間社会の多言語による異文化コミュニケーションなどにも見られるはずである。音楽と言語の関係を考えるとき、こうした音の発信と受信を検討に加えれば、音楽と言語を越えた音声表現のありかたを知ることができるかもしれない。

本発表では、音楽と言語それぞれの音声コミュニケーションの仕組みと特徴を、音楽学がどう捉えてきたかについて述べた。報告内容が人工知能分野における音楽研究や言語研究の方法論の検討に役立てばよいと願っている。